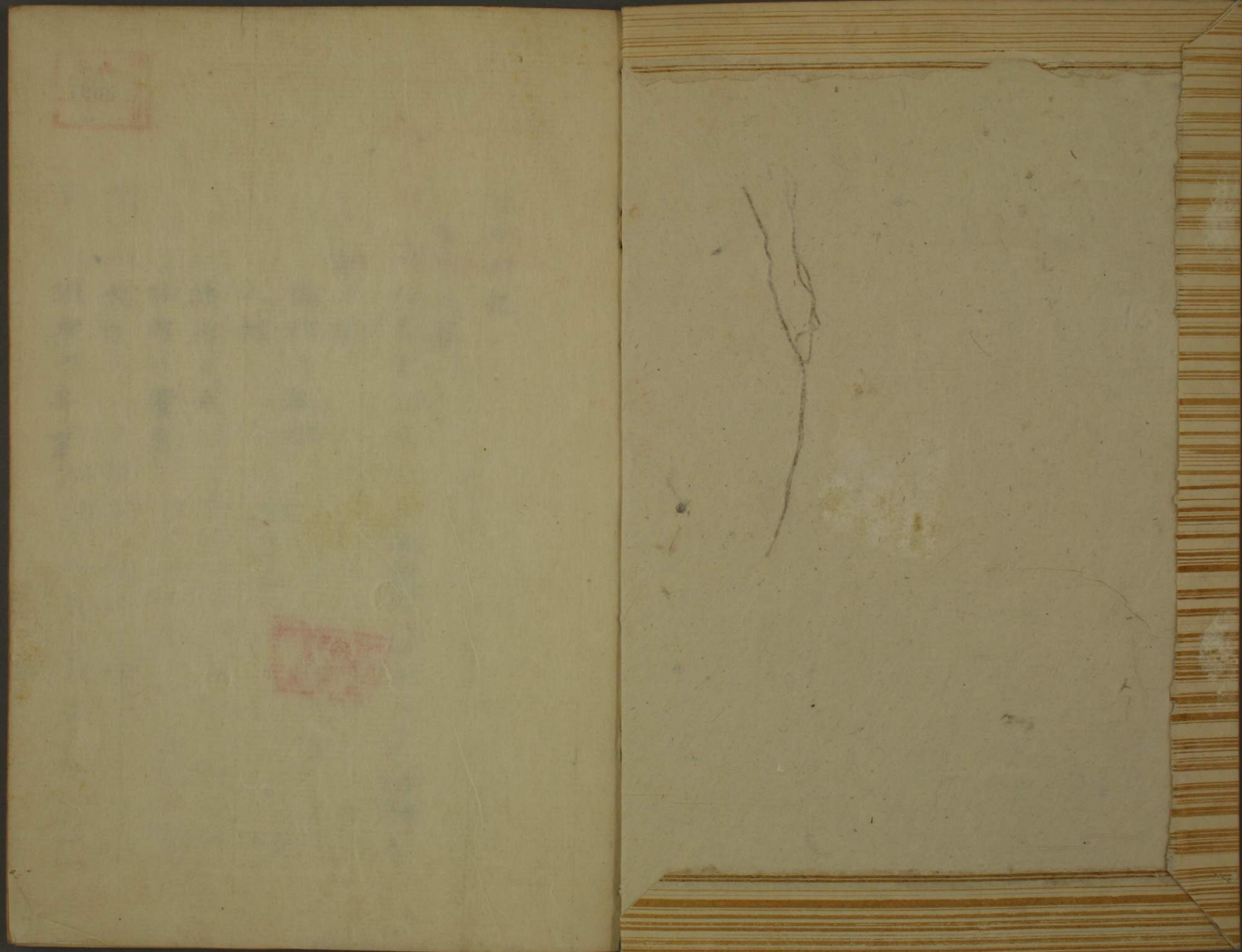




ル 2
3097
5





門 2
流 3097
巻 5



日本行紀

第十三篇

コムモドレベルリ琉球の「ゲント」の主長を

訪ふ事

隊伍の紀律

入城

請待の式

客館の饗應

大汀

調理の奇事

早稲田大学図書館
26.2.5
藤 泰

長手のよかくるへき物品を擔ひたる支那人これ
は後ひちの檐床の後ろは騎隊の將つれきその
隊ハ種々位階の將校二十二人を以て成るその
のちよ「ミスシスシ」号の樂隊續きその次よ
又水兵一隊甲比丹一人の指揮よて押へ行きた
り我輩首府「スキ」の首府よ達をるまでの行進の
間「フルク」の樂を奏し鼓子ハ兩間
クの樂の兩「フリユ」の鼓聲 一回歩
て
尊き「ケレト」前ハ四人の官人を隨へて最も

誠実子且「へ子」國往古の「ド」最貴との
格式を以て「コム」モド」を大ひなる日午の内よ
請ひけりあれハ彼まの誠実を頭を格別の證と
見へたりあの大ひよ誠実なる覆ひおを括る人
ハ紫色の絹帽をかぶり其帽ハ黃絹を以て製
したる教多の飾あり其賤微の人よ至てハ紅
色の毛織帽を冒あまきり
我輩前よ已述くる城の門口よ到り一時よ不意
の難頭お来れりそれハ「シケ」ニト「コム」モトトを
七府の別館の内よ請んあとを願へり然共あ

時英吉利船コイナルト号船斯子滞泊して其諸將
あり城中子請られし故子コムモトト其同一式
を造さるせめて全列を門前子排列しコムモド
レハハイルコルムヒア赤の樂を奏して騎將と
共子城内子入りたり

第一郭の門口の右傍子別子高牆を築き第二の
内郭となしありの牆の半より一線の清流あり
新しき線め木算内子入る然れとも正中の所子
一廣級を設け其門を通り大約六尺彼レのゴア
ト尺なり
高サましたる廣郭第二郭の内子来り此より尚

二級を上りて第三郭の内子来れり○此第二郭
三の二郭ハ長濶の屋を以て圍繞セリ第三郭の
上端子り堂社子等しき殿堂を見る行歩の道路
ハ大石版を志けり其道路或ハ此諸郭の周
邊を周り或ハ種々の方向子て交錯セリ此殿堂
の後子ハ濶き園庭あるならん○コレケント出
前の
後者の外ハ只一兩人の官人を見るのニ全郭の
様子寂寥として兵士或ハ番兵の跡もなし加之
一兵器をも見るるなり

彼れ第二郭の左側子て殆んと正中子對し建し

る廣き殿堂中子請けより是に於てコムモトト
コケニト止るあり訪問の主意を告げ合衆国あり
遠隔の島と親睦の交りを結んぶとの意なる
を知し彼しよ一二の贈おを与付せり彼れ甚し
温順におれを受け其後茶及び蒸焼の物一二を
あせり最後は全隊を率て府中子行しめたり此
所へコケニ止の別館ありて城門より遠から以
外國の客人のためよありの館内は於て本式の饗
應をなせり
予鏡を組立て兵士に佳好酒を与へ諸將り

敏中子於て饗應せり

ありの饗應せる場処は三所を區別し其中部山食
盤四脚置き「コムモトト」と「コケニト」人其上の二
脚より「コムモトト」右方子凭り「コケニト」ハ
左方子より此兩人の側子貴き大将一二人凭り
餘の將校は下の二脚に凭り或は敏内何処にも
準備せる他の食盤を借せりありの諸盤も往り
大約四寸彼の「コケニト」のの大きなる数多の皿を
載せ書記し得へからさる種々の美食を充て甚
く緻密に排列せる其味もよき良好なり但し

おの美味の諸物ハ我輩のとき粗暴なる航海者の口ハ却て精蜜ヲ過すたり教人の下官茶をもちめくまり「ム」ハ甚々小なりおのを用ゆるは乳汁と砂糖を加ふるおとなり然れども丁寧は我輩のためは冰糖を入れしる皿をおしておの盤上子あけり但しこの諸物ハ十二種の汁物を併へんためは前饗應なりおの十二種の饗應ハ其語して王の饗應といふその他客の位階は從つて三饗六饗九饗の別あり〇十二回ハ大尊敬を求めとなりおの汁物の通常は茶碗の大

さなる砵子盛り種々の肉魚蔬菜焼卵等を入れその製をへて美味なり殊に其中一種ハ犬肉を主として製造セリ其料子用ひしる犬ハ必を通常の街犬はあり以て定めて食料のためは畜ひしる若し犬なるへし如何とされハ余曾て此の如く緻密しし甚々美味なる肉を食せしことなり尚且おの者ハ他の子を盡せる美味を汚さざるなり

①注 其後火伴中西三人ハおの者実ハ犬肉なりし子を甚々疑ふ者あり然れども余ハ次の法

を以てあれを深知セリ即ち余り持る書翰箱の中
に午と犬を画きさらし他の食物及び此者を
かゆる時ある二図を以て其国人の一人は指
し示しその肉は此兩獸の何の方なるや審み
あれを知んことを頼みと言へば其人犬図の
上を指し示せり余りいふところ真なりや謬
なるやハ讀則ち推察をるべしとありん其他ハ
別子證據とあるものなり且つ其人余り思ふ
所を覺ざるや或いは其兩圖を理解せざるや
或いは其片絹を問ひしと思ひしかゝる知へか

うに如何とあれハ余この島に在りしあいし
一犬をも殺せしを見されハなり

茶後実子酒を拘之廻れり此酒ハ米より製し
る液なりアラクの大名酒は異なることなり但し砂
糖を混せり其味甚し愉快なり此液ハ壺に入れ
て盤上におき清めて撮むおとの大サなる磁器
の「コッパ」にて飲む此北方の居人ハ日常大量を盡
せり故に我輩を強ひて間断なく「コッパ」内におの
液を満りおの液ハ強かりし如何とあれハ余大
伴のため殆んど十五「コッパ」の之盡せり之れと

も心思式ハ兩足少しも感さることなり其他此
の島の諸人総て甚々少量のにて辞し而して
又更らば數回の之終り其大愉快は醉へる人ハ
止めん余レ已は十二分に至ると云ふへきおと大
の島の風俗なり

此の食物を食するは支那の如く所謂「ゴプス」
チク匹を用ふ即チ黒檀の細き箸を用ふ此の箸
を拇指と中指の間より持ち食指にて運用せしむ
第一の食物ハ此の箸を以てちとんとよく食し
けれとも然れとも汁物を食する時も我輩の如

き粗暴魯鈍を助くるためは磁器の小匙を予へ
り各の新し者をおもむ時ハ尖き小楊枝を漆へ片
肉及び焼卵ハ此れを以て食せしむ又二盞の美酒
を供ひ「ハコムモド」此れを飲り琉球の「レ
ゲンド」及び此の島の居人と「アメリカ人との永
久新睦を祝し」ハ其「レゲレ」此れを飲り合衆
国の安全及び正使「コムモト」「ヘル」リ」と其諸將
を祝せり

我輩大約一時の暇過て後皆大爽快を好て有り
来れり其故ハ一ハ請侍の懇切にして且言敬せ

るはあり一ハ酒「ウイスキ」洋「ビニク」上等を贈り
たるはあり我輩凡は鬪る旗と樂とをさきく
曰團中の蔭多き道を通り及び景色よき邱を越
て退けり既は半道に至る時船中を残り一は多
の將校兵士水夫来り迎ひ道の左右なる邱上及
ひ樹下は立て守護一且ツ笠を以て招きつゝ快
く祝セリ彼等亦れ國人と此のてく親睦せるを
見て此のてく悦みもまゝ其理りありいかんとな
まハ而事皆最初の訪は係り且ツ日本の屬国は於
て此のてく積待モテを受るハかならハ良き前兆な

らんを以てなり

第九日よ其の港を如帆セリ此時余等「サラトカ」
号船は曳綱は曳れて已は洋中に出たり余察する
はあれより無人島の方へ行暫時其地は撃而ん
るなるへ如何とあれハ軍艦中は在てハ只推
察するの外他な一其の他ハ其地は於て書記セ
ん

日本行紀

第十四篇

無人諸島

此諸島の位置

此島を初めて壑用セる諸人民

此島の豊饒なる事及び美麗なる事

「セビニソニセルソー」リトコロと云ふ事

をる事

「スタブレト」島に於て遊獵の陣をなす事

本邦へ帰り来る事

第六月十六日海中

第十四日の十明に於て既に無人諸島の見ゆる所より来き里此一羣嶋々北緯二十七度ありて日本の首府江戸と相距る事殆んど此度と同数の経度たるあり○此群島より以前迄を尚を未だ太平洋北邊に於て鯨獵船の薪水を求めむと欲する為りし時と此島へ来るのこゝに○英吉利の水夫「ガフレイ」と稱する者其船の一二の艚ナ伴と共に長船を逃けて此島の林中に潜し再び

其船の揚帆して走り行きし時追匿れ居りし事を十八百三十一年の事にてあり○其船揚帆して走りし時其船を逃去し者顯々走出此所にて其身を保持するたゞ「ロヒニクニセルノ」人の如く初めて種々の規則を定めし○此国を好む地として水甚だ多く尚且フ甘藷芋類樹木橙類烟草等の在るを見し○此数多の小港中に魚蟻の如くは集り而して其海濱の平らかなる所より夥しく亀集り来き里但し其亀を月光明らかなる時其卵を海濱の砂中に産む者あり

○是を以て其少一の徒植民を其食料に甚た富
めり加之時々此所への港の鯨獵船に蔬菜を商
ふ事を得へきなり○其徒植民を其産物を以て
鯨獵船の諸器械種類鶏家猪一二の家賊及び如
此き数多の物件と交易するなり○其家猪を逃
け去りて野猪となり非常な蓄息せり○此群島
中の他の島は古昔一二の野羊を持ち来り但
其野羊は共々非常な蓄息して之をも亦野獸と
なると徒植民其肉を取て塩藏となすと其肉を
しからさると至るなり

如此なる共々「サラレイ」の外此最初の徒植民は
漸々此島を去りて然るとも其代り他人の来
り住するあり但し其内一二の人も再び此島を
立ち去り○終り「サントウ」諸島より尚ほ又
少一の男子及び婦人来りて而して當今に此群
島中の大なる嶋は四十五人或五十人の人住
居ると至るなり

「ホルトルロイド」港を既し千八百二十七年に英
吉利船来り及び千八百二十八年に魯西亞船の
来りし後千八百三十八年に於て「シル」エドワ

ルドベルヘルス人の指揮せる英吉利の「ブリック」
船「エルブエル」船を海の深淺及び陸地を測量を
るため此所へ来り是より由て製せる細密
の地圖は最もある島の首港を「ホルトルロイ
」と稱し及び此群島中の三箇の大島は「ブール
」島「フェクランド」島及び「スタブレト」島の名を與
へり○其最初の島を群島の最南にあり其終
りの島を群島の最も北にあり此西島の中間及
ひ其近傍に尚ほ甚だ多くの諸小島諸岩礁諸暗
礁及び細長き諸砂洲あるなり

此諸島の周邊を既に余り画圖叢書中に多くの
附録の前表を顯しせり而して我等破を下さん
と欲して十二時を過る頃「ホルトルロイ」港
の西灣へ船を廻し一時を速し「ホルベル、ベイ」エ
レ」或は「サルツフルグ」以上改羅の地名の地名も美麗なる
一湖中に轉徙せし如く余も思ふなり○此美
麗にして廣く且つ深き港の周圍を高く急峻に
して畫圖の如く形せる岩礁繞々あり但し其岩
礁は只適應の廣き一行路を開けし此港の中央
に其形ちなるもの「ギブテラ」タル改羅の地名の岩礁

ヲ齊しき高く聳へし岩礁の一塊突出せし但此
港も亦ギブラルタルの如く一二の大砲を備へ
て以て敵の奪ふ可からざる如く成し得へきを
至〇此港の後の方の地も高き密林の生せる岡
を以て界とせし其岡の脚辺より廣き一帯の豊
饒の田延び出たり此より稍々遠く離れて甘蔗
を植へし芋芋田烟草田瓜田等の中央より半々樹
林も蔭まし後植民の家屋あるなり

此港の暗青色なる水を隨意に生ひ茂る岡上
の小林と鮮緑色なる田畑と海濱を沿むし細長

き白砂と及び羨麗な形ち作る岩礁様なる氣
色の「かうニ」ト石と共に秀を競つて甚々愛し
可きなり但し其「かうニ」ト石ハ海潮より由て処
々洞伏の穴を鑿りて其穴の高き穹隆状の所
ハ午時の日光の映射より由て余り本國の僧徒の
苗子請談場を思ひ出さしむ〇此処の海濱も羨
麗なる斑の貝を以て布き渡せり而して其水の
冷々なる処より数百万の肉眼にて見へかゝる小
虫石上より苔の如く集り居たり其虫の夥しく集
りて彩せる珊瑚ハ天藍色の海水中に枝を分ち

て陰密に其羞麗なるるを藏し置んと欲する如く見ゆるありの救時の間端舟の船を越し其深所を觀覽して造物主の才智に就ての道理を穿鑿する事し沈めり而して之を拜せり

終に此觀覽に由て余の心は生ぜし迷ひを自から悟りし時其隨意に裝飾し生ひ茂る草木の世界に料陽の光りに由て金色に彩色せられし敷更に一箇の驚駭を引き起して蒼然たる暮色の四方に記り海も岩礁も岡も皆悉く陰匿するに至れり○然るに余も眼目を地平線の方へ向

はりむれに圓月波上より昇り或は余の頭上の木星の爛々と清明に且つ愛を可く光りしを見まはしに余の精神を以て辨別をへからざる程の驚駭を引き起さしむる造物の愕然たる事を見るなり

古昔「ロビンソン・クルソー」の世上に露布せる説話をあせし世人の知する「アレキサンデル、セルキルク」の「^{白霧}地の海岸にあり「^{白霧}ニフェル」ナニデス島の艶麗なるに由て彼も其島を離れ得に終に其島に居住せし程に如何して惑溺せ

し歎と疑ひしる余初めて今十分子會得セリ○
余もいよかしく遠く此島を遊行して一二の好
景の場如子逢ひし時甚疲労セしる此れハ余れ
亦此如子住するを要を可きなり○幸此島子
於て殊子余意子適する所の者ハ艷麗なる森の
多く生せる岡の間子ある谷と種々の向みて流
かせる二個の小川となり而して此小川ハ中央
子相合して端舟をハ十分子浮ハむ可き程の深
さの小川となるなり○此緑色の牧場と並葦田と
の間子ハ別廬子二人「イニチア」子「其屋を結

ひて互ひは相和して生活セリ但し其一人ハ「オ
タヘイ」人他の一人ハ「マルキー」セ「島の」人な
り○余も此周囲の画図の人心を感溺セしむる
力を以て余心を束縛さまし如く覚へり而して
余も自己子勤めを免きて此平穩なる谷の間子
住居セし事を思ひ起さし然れハ神靈余し子壯
健なるると及び力とを子へし間々余世人と共
し生活する事子関するを要すと云念慮あるの
こを以て余子此思ひを断しめしり

第六月十六日

朝尚ヲ未夕夜の明さる以前子我等此港の南の
端子着岸セリ○此度ハコムルバイアルドクイロ
ル人指揮者の任を請けたり而して此子上陸を
るものハ水まじひ海軍の歩卒を除くの外若將
の隊中の勢めなき者之をなり○着岸セー場処
より我レカ川の流れ子沿いて山の方へ行けり
其故々我等上陸セー処の近傍の家屋中子郷導
居らば且ツ我等の最初子入り込マ一道路ハ株木
の林となりて其道断れハまり○露子潤ひ且
ツ多令ハコスブリニゲルフランテニ樹の生くる

随意の草木の生ひ茂れる潤滑なる土地ハ我々
行を難ま志のり○今正しく昇り上り一日も柘
植樹の重密せる葉子遮きられて其光りを漏も
事あまハおり一而して我等此林中の闇黒なる
間道にて其前途を見るる終子二十歩或ハ三
十歩程なるを以て此行程々として進まん終子
子二十川の床子沿いて高山の焼もる廣き谷の
中子来ら一むる子至れり○我等其谷子近づき
寄れハ益々其草木隨意子生長セリ同ニテニの
ハ或野生アナ、ハの森あり其葉甚々刺傷を可

まを以て終り進行をへからをなりし時不得止
川中を道として進み行けり○然るに我等直に
其藩南に煙草及び甘蔗の由ある地方に達せり
而して終り我等のためは柘植樹を以て屋を葺
ける二軒の家を見出せり○然るに其内は人あ
らざるを以て其人を求むる為は我等手銃を放
殺せり然るに長くして且つ強き聲響を以て之
を應せし後ハ銅色の「インヂア」子に人出未
たり但し其人及び半面ハ淡青色の割刺をなせ
し者なり○其人及び我等の少くも致せし其類

伴の者ハ皆「ルキ」セに諸島の一なる「ヌーカ
ヒ」島の人居り而して其類伴の者の方ハ亀を
解きて居たり但し其亀の残り者ハ瘦狗十八頭
来りて互ひに争ひり○裁判人の「トド」トと稱す
る男ハ終り我等の郷導となりて其身を勞せり
○我等是より東の方に向つて進行し而して其
所にて直にむし高き山の頂に達せり○此の
島中の北部に於て我等野猪の足跡を多く見
り此野猪ハ即ち家猪の野猪と交せし者なり其
野猪の多きと云徴し野猪の踏あらして泥土

中子深き穴を残りしを以明らたるなり
即時子イニチア子二人の犬ハ逃げ去り野猪
を猟り出せり○此子於て我等直に遊猟を催せ
り○我ら若將の一人ハ凡百歩諱前途あるを
以て其岡の脚邊に於て犬と共に程能き場処に
居り一獸の其犬を離れて再び同一路を踏ひ我
方子向みて走り来り一時十分之を達するを
得り○其若將ハ亦其身を翻轉して之を發
射せり然れ共其弾ハ正しく余ら足の近傍の地
中子形ひ入り如く之を誤まり○其猪一直

線子余子向て走り来り故に余其弾を其頭中
に射ぬ
一片の薑餅を食ひ野壘より一口の水を喫せし
のち更に前の方へ進行せり○攀上り攀下り多
く上下せし後チ大子努カして此島の南東の部
にありし高き岩礁の傍に一港中に遊せり○
此処に於て正しく午時となり故に我等休憩
して火を焚き本船より携へ来りし食物を添へ
て持ち来たる家猪の肝臓心及び膀胱と歩許の
鹿生の蒜とおよびジャラテイスマッペル等と以

て甚く美味の午飯を製せり我此困難ある道を
歩みしと海中よて清涼の浴をなせしとよ由て
饑ゆる甚くしけれは多く食せし由て我
等帰路の最初二時程ハ歩行甚く困難なるよ至
りり○此夜九時よ我等初めて此島の南の端の
一島よ達せり端舟よ知らざるためよ打銃を発
射せり而して十時よ死をる如く予れて再び本
船よ帰り来り

翌日余しなほ他の將と共に「スタフレト」島よ
て遊獵の陣をなさんとして「サラトカ」船の二人

の艱伴よ連れ去さまんと我等のためよ老ひし
る従植民二人よて加農砲を其方へ持て来りし
○「ホルトルロイド」港を出て直ちよ我は海路を
北の方へ取りし○我「ベイル」島及び「ダククラ」
島の西方よある一群の岩礁を過り去れり但
其一群の岩礁ハ「スタフレト」島の長く形ち
作りし海濱と共に甚く艷麗の景色をなせり而
して恰も「カレイ」スコップ見ハ物品を入きて
増加して限りなく見へ四ウキ見ハ其数甚く
種々果子果色賣して甚く面白く見ゆる後動を
の如きし中よ放ける如く時々其景色変りて今
の如き

一段艶麗を増加セリ○「ホルト、ルロイド」港より
「スタブレト」嶋に至る全路程八里の間野の景
色を画く人の為子ハ最も美麗にして殆んど連
綿として断絶セざる画手本の一帖を成セリ○
我等此小一港に船を着け直に急峻なる岩壁を
よち上り其故ハ我等此島に沿ひて進みし時
岩礁の頂に野猪を以て掩へるを見れハなり但
し此野猪を掩へると云真の留意を執るべきな
り
我等各々其自己の路を撰ひて勇を奮ひてよち

上りし余ハ其左翼たり而して漸く其頂上を来
りし時凡百歩程の距離の如し二十五或三十頭
群せる野羊を見し但し其中の二頭ハ黒色の肥
大なる牡野羊なり○即時に余其方へ赴けり然
も其暫時の間ハ尚石未タ其二頭の内何しを考
んとも決定セさりしなり而して暫時休憩をへ
ざるを要をへし程に余は双手震へり是し一ハ
努力して高き攀々上りし由り一ハ好き獲物
を獲んと欲るし由れり○然れ共此獲物を見過
をへからざるを思ひ且つ速うに決定せざる

を要セ—故に余再び銃を取り上て發射セリ然
るに其弾ハ牡鹿羊の頭より九六枚程上の所
て岩礁に當り○余一鬱々として再び坐セリ
而して殆どと若き学校の書生の讀書を廢セ—
り如き感覺をなセリ○後植民の一人ハ右翼に
ありて甚く獲物あり此者ハ肥へ太き一の野
羊を打ち留り但し此肉ハ余に甚く美味の晚
飯を供セ—此のなり○此如に破船セ—船あり
余しこれを以て晩飯を製する薪とセリ○此船
ハ「ギリ」材及び銅釘を以て製造セ—模様を以て

余し之しと日本製の船と思へり如何と云れハ
支那ハ船を製造するに此種の木材も并に銅釘
をも用ひされハなり○此如ハ江戸を距るる三
百里たるを以てされハ我等此船を日本船なり
と云るる實と云はしき也

我等一二の亀を捕るため一月の清光を備せり
但し其亀卵を砂中へ産むるに満潮の時海濱
を匍匐するものなり我等此如にて暫時の内は
三箇の亀を獲り但し其亀の重ハ三百磅ポンドより
多く下らざるなり而して我等双手を十分に労

動セリ如何となれハ其亀ハ半ハ水中ニテ捕ヘ
一放ナリ○此亀と海濱ニ引掛け及び之を擔ヒ
行子ハ六人より多の人を要セリ

此諸事と終りて后チ我等ハ夜具を卷きて翼朝
迄静ク子寝たり○温クなる茶を一碗喫セ一後
チ我等ハ夜の明くる迄尚他の方角の岩礁を探
索するたれ子出行セリ○此度ハ余シ此島の最
高き処ニ至るるを目的とセリ而して急ぎ騒ぐ
るなく注意して静子より上らんるをなセリ○
暫時攀上り一后チ殆んと其頂ニ到達する結構

ある膏腴の上絶へたり是レハ其燒爛せられ一
カウニ一止石の彼此の所へ錢脈と混せる場処
をなれたるなり○余此処より先へ行子午と足
とを以て匍匐するを要も如何となれハ此処
ハ其攀上るる危険ニして且つ困難なれハなり
○終子余日出前ニ高き頂ニ達セリ此処ハ其景
色甚艶麗ニして余の疲労を稱セ一子足れり○
余の前面より怡も金水中ニ數多の鷲岬現出セ
る如く尚ほ且スタブレストニ鷲の画図状をな
せる海濱ハ隨意ニ蕃茂して裝飾せる草木のあ

る岳を以て羨麗の地を成し加之其勢を助くる
は此島に栖止せる教百頭の野羊の數十群をな
せるを以てセリ

余は是下の諸谷ハ尚ヲ未夕周黒なり而して只
其岩礁の尖頭の旭日之しを照セリ○余レリ
ラニ地^各の尊教をへき寺院の屋上子ある球状の
屋背より「アメリカ」地方の大平海を観覽セし
あり之レ殆んと一年程以前の事なり○其時余
の心中は此旅行を又ハ尚なをるあり手否の疑
りひ起水り然レ共余其時地球の四方の三より

多く周リてのち一年後れて同一大平海の地の
境界に來るるあらんとハ多く考へざりしなり
○余レ昔一のるは於てハ皆恍惚たり而して已
れ此時「ルルヌタードテル」湖にありて再び兼
て知れる景色を見しるを想像セリ而して此考
ハ余り心中の鬱を閑けり余ちれり就て後來る
事を考へ及び我等の此度の企るも調のひ成就
をるならんを思ふ時余尚爽快よりて岩礁に
微をるをく余レハ純精の「テイロレルイクセル」
評なりと叫ぶに至れり○然れとも此叫び聲

今海濱の方へ帰り来り清涼の浴をなし其右に
飯を食ひて午時子我本船子達セリ○我等の獲
し野羊九頭と亀三箇とを前夜本船へ贈りし端
舟ハ既子此処子送り来させし○其翌日我等再
ひ海子あさり而して身二十一日子無難よしと
再び琉球子達セリ其間子我急死脚船のカブリ
也^船英吉利の他國死脚の書状囊を以て上海よ
り此所子来り泊セリ

